

家畜診療に携わる日々の中で

小松耕史[†]（南薩農業共済組合・鹿児島県獣医師会会員）

私が鹿児島県南九州市川辺町に赴任してから早一年近く、日々の診療と雑務に追われながら、月日の流れの速さに驚いている。まだ一丁前な論を語れるほどの経験と技量もないが、本稿で産業動物獣医師として私が普段感じていることを思いつくままに綴らせていただきたい。

1 川辺町の紹介

鹿児島県薩摩半島の南部に位置する南薩地区には肉用牛8万5千頭、乳用牛4千頭が飼育され、他にも養豚・養鶏も盛んな畜産地帯である。ここ川辺町もA-4ランク以上で認められる高級ブランド、川辺牛の産地であるが、悲しいことに学生時代の癖が抜けぬ私は、焼肉となるとつつい安価なチェーン店に足を運んでしまう。

診療車で郊外を走っていると、今まで特に気にすることもなかった四季の移り変わりに目を奪われる。春は菜の花の爽やかな黄色に包まれ、初夏には新茶の黄緑色がきれいに刈り取られている様子に感嘆する。夏も真っ盛りになると、熱中症になりながら往診しているため景色に目を向ける余裕はないが、暑さも一段落し、スズムシが鳴く頃になると、あたり一面の稲穂が夕日で黄金色に輝くさまに、しばし診療車を止めて、見入ってしまう。

2 農家との関係

家畜診療を行う上で、農家とのコミュニケーションは必要不可欠である。大きな声での挨拶から始まり、天気の話、景気の話、牛の話、畜産の話、生活の話など、内容は様々。その会話を通して、農家や畜産業界の現状を把握したり、新しい情報を共有したりすることができる。特に新人の私という人物をまず覚えていただくためには、会話が重要な手段である。そのためには、普段から政治・経済、社会一般のことなど幅広く知識を取り入れておく必要性を感じている。

日々の個体診療を重ねていくと、その農家ごとに多発する疾病が見えてくる。その往診依頼があれば治療して、の繰り返しではキリがないので、何とか発生自体を減らせないと考えるようにしている。あちこちの農家に伺っている獣医師だからこそ、うまく予防できている農家との違いを考え、牛舎構造、飼料、衛生、ワクチン

プログラム、牛の体格等、様々な条件を考慮した上で、農家と話し合い、少しでも農家の利益に貢献できればと考える。まだまだ個体診療で精一杯であり、新人の私に対する農家の信頼も危ういところであると思うが、群管理も視野に入れた診療に挑戦している。

3 チーム診療

先輩の獣医師には、よく「我々はチームである」と教えられる。基本的には一人での往診となる産業動物の臨床だが、お互いに情報を交換し合い、協力し合う。珍しい症例があったならば、一緒に診て回り、手術となれば何人も集まってくる。複数の獣医師が意見を出し合い治療していくことは、一頭の病畜にとっても、より良い治療環境にあると言える。また、私のように右も左もわからない新人にとっては、自分の行っている治療が的を射ているのか、しばしば不安となるため、時折その症例の往診に立ち会っていただくことは、大いに勉強となる。

4 牛への愛情

産業動物は体力勝負という言葉をししばしば耳にする。走り回る牛を捕まえ、力ずくの保定で治療したり、ときにはやむを得ず無麻酔で手術を行ったりもする。しかし牛にも感情があり、痛みや不快感をよく表す。ある農家で注射が嫌いなのか、繋がれるのが不満なのか、ひどく暴れる肥育牛がいて、無理やり保定して注射しようとしていたが、そこに別の年配の従業員が現れ、牛に優しく声をかけながら背中をさすってやった瞬間、ピタッと静

小松 耕史

— 略 歴 —

2008年 鹿児島大学卒業
南薩農業共済組合勤務
現在に至る



[†] 連絡責任者：小松耕史（南薩農業共済組合川辺診療所）

〒897-0215 南九州市川辺町平山6140-1

☎0993-56-0138 FAX 0993-56-0142

E-mail : koji_komatsu@hotmail.com

かになり、おとなしく注射を打たせてくれたことがあった。そして「牛だって同じ血の通っている生き物だから、まずは優しく声をかけて安心させてあげないといけ

ないよ」と教えてくださった。普段忙しいとどうしても忘れがちな牛への愛情だが、この言葉を忘れずに牛と接していきたい。